

プロジェクトワークと正統的周辺参加理論

——留学生が大学という実践共同体に参加するために——

Project Work and Situated Learning Legitimate Peripheral Participation:
to let foreign students participate in a university, or a community of practice

梶原 綾乃

要 旨

プロジェクトワークは留学生の親和欲求や承認欲求を満たすことに大きく貢献している。学習において「教室で教えられることが、現実において常に有効であるに限らない」と言われているが、プロジェクトワークはその教室と実社会でのギャップを橋渡しする役割がある。さらに、プロジェクトワークは留学生の内面だけではなく留学生の外部にも変化を及ぼす。正統的周辺化理論では、学習を個人の内化に置くのではなく参加する共同体とのためまね交渉と意味の生成により学習が生起すると考える。そして学習と同時に共同体の成員として「正統的に」認められ、アイデンティティも形成されると考えられている。そこで2014年度朝日大学留学生別科では、前後期期末に正統的周辺参加理論をもとにプロジェクトワークを行い、その活動と学生たちの様子を報告する。

キーワード: プロジェクトワーク、正統的周辺参加理論、実践共同体、インタビュープロジェクト

1. 留学生が外国語学習に求めるものとは何か

母国を離れた留学生が外国語学習に求めるものは何か。当然、語学習得が目的であるが、語学習得といえども様々なレベルがある。マズローの欲求5段階説というものがある。心理学者のマズローが唱えた説で人間の欲求(動機)を5段階に分けたものである。5段階とは「生理的欲求」「安全欲求」「親和欲求」「承認欲求」「自己実現欲求」を意味し、経済学や看護学でも応用されているが、留学生の適応過程においても適用されると考える。

来日直後、言葉や慣習がわからない外国において、まずは食欲や睡眠、排泄などの生理的欲求を満たすこと(生理的欲求)が最優先事項になる。来日してやっとたどり着いた宿舎の初日に、寝具がないまま一晩を過ごす留学生の話聞く。また、学校でガイダンスを受けながら、いつトイレに行けるかタイミングがわからず、仕方なく中座する留学生もいる。出された食事が何なのかかわからず、疑心暗鬼で口にしなければならぬ。コンビニに行っても、何をどうやって食べればいいのかかわからず、仕方なく割高のおにぎりや弁当を口にす。言葉さえできれば、これらの欲求を満たせるのに、と赤ちゃん返りしたような無力感を痛切に感じる時期である。

やがて、学校生活が始まり、毎朝同じ時間に学校を行き来することに慣れていくと、学校が提示する案内や情報を聞き取らなければ、不利益を被る結果になる。教職員の指示、提出物や支払いの期限、ゴミの分別などの社会ルールの遵守、それらが遂行されなかったことで引き起こされるトラブル、

あるいは熱や腹痛などの体調不良時に、どう対応すればいいか。安全な生活をしたい、危険を回避したいという欲求(安全欲求)が留学生の次の動機となる。

そして留学生が最も望むことが、現地の日本語話者と上手にコミュニケーションをとりたい、友だちになりたいこと(親和欲求)である。授業中、日本人の先生の冗談に笑う、それに対して気の利いた反応をする。あるいは、日本語で他国の留学生と議論をしたり、お互いの悩みを打ち明けたり、おしゃべりをしたりする。日本語によるコミュニケーションを通して他者と感情を分かち合い、孤独感を解消し、視野を広げたいと思うこと、それが親和欲求である。

次に挙げられる「承認欲求」とは、自分が目的集団から価値がある存在だと認められたいということである。自分の存在が尊重される。自分の発言や主張が採用される。あるいは、自分の個性を認められた上で依頼される等、何らかの役割を担い、必要とされることに喜びを感じる時期である。学業よりアルバイトに専念する学生の中には「私がいなくて…」という使命感に駆られている姿がよく見られる。教室では、ただ受け身の存在でしかなかった自分が、アルバイト先では「(他の誰でもない)この私が」必要とされている。しかもそれによって報酬を得ている「自立した自分」に満足しているのである。

そして、最終的に「自己実現欲求」に達するが、この段階になると、進学や就職、出世や起業などとそれぞれのニーズが多様になり、特定化することは不可能になる。留学先の現地で社会的地位を得て生活が安定し、自己肯定感を得ることが一番の目的であると考えられる。

これらの段階は、決して順次に展開するとは限らない。だが、多くの留学生や外国滞在者は同じような感情に囚われるのではないかと考える。

しかし「親和欲求」以降の欲求段階を日本語学習で満たす留学生は現実に少ない。個人の性格やアルバイト先の環境などで日本人と話せる機会があっても、多くは挨拶程度で、ほとんどが同国人で行動しており、「大学に入ったら・・・」「(今より)日本語が上手になったら・・・」日本人と仲良くなれる(かもしれない)という期待のまま、日本語予備教育校の卒業を迎える。

だが、実際進学先の大学においても、日本人学生との交流が自然発生的に生まれる可能性は極めて低い。梶原(2003)の調査では、大学側が交流イベントを設けても、その場での交流はできるが、継続的な交流はあまり見られない。これは、留学生だけではなく日本人側のコミュニケーション能力の問題(2010a)でもあると指摘してきたが、今回の論文では割愛する。ただ、留学生たちに「なぜ日本人と交流できないか」と問うと、「自分の日本語能力が低いから」「自信がないから」「もう少し勉強してから」と自分の非を責める消極的な回答が目立つ。

どこまで勉強すれば、日本人と交流できるのか。その問いを突き詰めて、彼らのタイミングを待ち続けると、残念ながら予備教育校は、日本社会へ飛び出すための準備機関というよりも、異国で孤独な同国人の友人を探し、お互いを癒す場としての要素が強くなっていく。事実、他校での調査であるが、日本語学校に通う動機として「母語で話せる友人に会えるから」と挙げる回答が多かった。結局、多くの留学生は同国人同士で親和欲求を満たしていると思われる。

さらに「承認欲求」の段階になると、もはや教室内では限界がある。外国人ばかりの日本語教室の中で「日本語が上手だ」と認められることだけにとどまらず、日本において〇〇人である自分、〇〇(名前)である自分を認めてもらう、自分の考えを聞いてもらうためには、どうしても日本社会に出て行かなければ、その欲求が満たされないからである。

つまり、「承認欲求」を満たすために、他者＝教室外の日本人の存在は欠かせない。その国の文化を受け入れ適応しながらも、自分たちの意見も主張し、自分の存在を認められたい。外国に滞在している者の多くは当然それを望むようになる。

2. プロジェクトワークとは何か

プロジェクトワークは、上記のような学習者の親和欲求や承認欲求を満たすことに大きく貢献していると考えられる。プロジェクトワーク、あるいはプロジェクトメソッド、最近では Project-based-Learning (PBL) と呼ばれる学習活動は、その出自は様々であるが、起源はジョン・デューイの経験学習にある。学習に必要なのは、知識の伝授だけではなく、学習者自身の経験とそこから生まれる動機と能動性が重要であると説いている。

プロジェクトワークは、主に TESL/TEFL の活動の一つとして 80 年代半ばより注目された外国語学習活動である。Fried-booth (1986) は「教室で教えられることは、理論上役に立つが、現実(実践)においては常に有効であるとは限らない。また学生が教えられる言語と実際に学生が望む言語の間には明確なギャップが存在する。そのギャップの橋渡しがプロジェクトワークである」と述べている。

状況的学習理論に大きく影響を与えた人工知能の研究者 J.S.ブラウン他.(1991)も、現代の学校制度は、実社会から切り離され、学校文化という独自の文化を生み出し、教室での活動によって教師から生徒へ知識が伝達されている。しかし、そこで学んだものは実際の社会で必要とされるものと全く関係のないものになっていると述べている。そして「我々は知識というものが部分的に社会的・物理的世界に埋め込まれたものであることを主張する。そして、これらの埋め込みの環境によって人々は問題解決の重荷を効率よく分担することが可能になる。学習とはこういった種類の埋め込まれた活動を通じて強力な理解が構築されるというプロセスなのである。」と強調する。

つまり学校社会では、文法や定義などの抽象的な法則を提示し反復練習を経て定着を図ることを中心としているが、実社会では、様々な状況や文脈にその法則が「埋め込まれており」、学習者はその状況から法則を「瞬時に」読み取りながら、学習者自身も状況や文脈、あるいは(概念的)道具や協働作業を活用し、自己実現を目指すことが第一義とされる。そして、その過程が困難であればあるほど学習者に強烈な記憶を残し「経験」と言う形で蓄積されていくのでというのである。

これは、プロジェクトメソッドにおける、系統学習と問題解決学習との対比であり、PBL における、古典的学習と状況的学習との対比でもある。外国語学習におけるプロジェクトワークも、教室を飛び出し、飛び出したその過程で読む・聞く・書く・話すの 4 技能の統合が求められることや言語の背景にある社会的スキルなども必要とされる点で、状況的学習であり、問題解決学習なのである。これらの活動は、初中等教育の総合的学習や最近注目されている高等教育における PBL とも通じる概念である。

これらの学習活動の重要な要素は、「教室の外に出ること」、「学習者中心で活動すること」、そして「それらの活動を振り返る時間を設けること」、の 3 点に尽きる。

まず「教室の外に出ること」によって、学習と実践のギャップを埋めることができる。それは新しく挑戦的でリアルな場面において、既に習得したはずのスキルを試す機会が提供されるからである。学んだことが実際の場面でどのように使われるのか、はたして学んだことが実際に通用するのか、を学習者は目の当たりにすると同時に、見たことがない予測不可能な状況にも遭遇する。しかし、それが学習者の次の課題への動機をさらに強くする。

次に「学習者中心で活動すること」によって、学習者は自分のしたいこと「自己実現」に向けて、活動することになる。従来のように「先生に言われたから」「させられている」という感覚から解放されることで、自己効力感が得られる。しかしそれと同時に、プロジェクトの問題は学習者自身の問題にもなる。学習者自身が決めたことであるため、そこで起こった結果に関しては、明らかに学習者自身の責任になるからである。この自己効力感と責任感、両者を同時に得られることで、学習者中心の活動は、より深化

を増す。

そして、これらの活動が学習たらしめる点は、「振り返る時間を設けること」にある。活動を振り返ること—monitoring—で、プロジェクトで生じた問題や学習者自身の失敗を認識させ、それらを自分自身で解決、克服した達成感と自己効力感が、次の課題に向けての学習動機に繋がる。

多くのプロジェクトワークは、前述の流れに則り行われてきた。技能やスキルが統合的であるため、具体的数値での教育効果を出すのは難しいが、学習者の満足度は概ね高いと報告されている。もちろん、系統学習や古典的学習と違うため、参加者全員に同じ教育効果がもたらされるかという点は厳しい。しかし、毎回プロジェクトワークを行った後に「なぜ、先生はこのプロジェクトワークをしたと思うか」という問いを投げかけると、面白いことに全員違う答えが返ってくる。それは、間違いなのではなく、それぞれの学習者が経験した中で一番印象的だったことであつたり、失敗したことで今後何をすべきかと考えた結論であつたりと、それぞれがそれぞれのレベルで課題を見つけ出した結果であり、プロジェクトがそれぞれに内面化した結果だと考える。(梶原 2010b)

3. プロジェクトワークと正統的周辺参加理論 (LLP 理論)

さらにプロジェクトワークは、教室外でも変化をもたらす。梶原(2006)が地方の短期大学で行った地域交流を目指した活動報告では、留学生が参加先での日本人や日本社会に大きな変容をもたらしている。最初は、外国人との接点がなかった老人会や婦人会のメンバーにビジターセッションのゲストをお願いして始めたのだが、年3回と毎年セッションを重ねるごとに、ゲストである日本人が積極的になり、担当した留学生を自宅に招いたり、祭りに誘ったりするようになった。また日本人ゲスト同士の横の連携が生まれ、地域の在住外国人に日本語を教えるボランティアグループが発足されたり、最終的には市民募金型の留学生奨学金制度が設けられるほどになったのである。この双方向的な効果は、留学生が日本社会に「継続的に」参加し、その中で留学生個人としてのアイデンティティが認められ、社会の構成員として認められた結果であり、いわゆる親和欲求、承認欲求が満たされた結果だと考えている。

レイヴとウエンガー(1993)は、人間の学習過程は「ある特定の(実践)共同体に参加するその過程で、学習が生起する」と「正統的周辺参加理論(LLP 理論)」で提示した。これは前述のブラウンらが挙げるように、知識というものは状況に埋め込まれているという点では同じである。しかし、正統的周辺参加理論の違いは、学習を個人の内化に置くのではなく、参加する実践共同体でのたゆまぬ交渉の中で意味が生成され、活動の一つとして学習が生起すると考える。そして学習すると同時にその共同体の成員として「正統的に」認められることでアイデンティティをも形成し、さらに成員として「(中央集約的、直線的ではなく)周道的に」参加することで、さらに共同体の再生産を行う過程を示している。

レイヴらは、その著書で「活動、作業、機能、さらに理解は孤立して存在しているわけではない。むしろそれらはより広い諸関係の体系の部分なのである。これら諸関係の体系は、社会的共同体から生まれ、またその中で再生産され発展させられるのだが、それらの一部は人間同士の関係の体系である。人間はこれらの関係によって意義付けられると同時に、これらの関係を定義づける。かくして学習は、これらの関係の体系によって可能になるものに関しては別の人格になるということの意味している。」と述べている。

つまり、プロジェクトワークは、留学生が望む親和欲求や承認欲求を満たす活動にもなり得る。単純に外国語習得の統合的なイベントとしてだけでなく、留学生が所属する組織の「正統な」一員として、

直線・直接的ではなく、留学生個人のニーズや能力によって試行錯誤しながら、組織に「周知的」に何らかの貢献をするという形で「参加」できるものが、プロジェクトワークの醍醐味ではないかと考える。

4. 実践報告～2014年度朝日大学留学生別科 インタビュープロジェクト

上記の定義をもとに、今年度実施したプロジェクトワーク、インタビュープロジェクトの報告を行う。インタビュープロジェクトとは、留学生が日本人にインタビューをして、日本人の考え方を聞くと同時に、敬語や聞く態度、マナー、メモスキルなどを意識して習得するビジターセッションの一種である。(梶原2004ab、2005ab、2006ab、2010abc) 1996年より様々な教育機関で実施してきた活動であるが、今回は2009年に兵庫県の大手前大学で日本人大学生約800名を対象に実施したプロジェクト(梶原2010a,2010b,2010c)を参考に、ゲストが指定する時間、場所を訪問し、インタビューした内容を、朝日大学留学生別科オリジナルのパンフレットとしてまとめることを最終目標に設定した。今回のインタビュープロジェクトでは、特に以下の狙いがある。

① レベルに関係なく、別科生全員が参加できるプロジェクトであること。

多くのプロジェクトワークは、中上級レベルで行われている。しかし Fried-booth が挙げるように、初級レベルでもできるプロジェクトワークはたくさんある。とにかく、留学生全員が「正統的な一員」として参加できるプロジェクトを企画した。そのため、完全な学生主体の活動にはできなかったが、できるだけ自由度を意識したつもりである。

② 自分のためだけでなく、誰かのために行われるプロジェクトであること。

留学生の中には、朝日大学に進学する者もいれば、他大学に進学する者や帰国する者もいる。その彼らが朝日大学留学生別科に在籍していた記念としてのパンフレットであり、また、1年間あるいは半年間の日本語の習得結果を披露するものとしてのパンフレットである。さらに、来期やってくる後輩や現地で朝日大学に進学を考えている日本語学習者のためのガイドブックとしての役割も担う。自分たちが作ったものが誰かの役に立つかもしれない、この事実は前述の「承認欲求」を意識したものである。ましてや、日本語でまとめるものであるゆえ、担当するゲストの話聞き取り、内容的にも文法的にも正しくまとめなければならない、という責任を課すことで、学生たちの使命感をより強調する。

③ インタビュー対象者は、朝日大学の人間であること。

「朝日大学ってどんなところ？」というテーマで、前期は朝日大学の教職員、後期は体育会系の学生をゲストにインタビューすることで、自分が所属する大学(実践共同体)がどんなところか改めて知る機会を提供する。学内の日本人と話す機会を設けると同時に、ゲストの口から朝日大学を知ること、大学に対する興味と所属意識が芽生えることを期待する。実際、プロジェクトワーク実施前に留学生たちに「朝日大学ってどんなところ？」と聞くと、朝日大学の客観的な情報は皆無で、自分たちが日々通う教室や授業の雰囲気や感想しか説明できなかった。進学する留学生が面接試験時で、自分が所属する組織がどんなところであるかを客観的に説明できることを一つの目標とする、

4-1 事前準備

プロジェクトワーク開始前に、まずゲストを集めなければならない。ゲストを選定して参加承諾を得て訪問可能な時間を聞くために、前期は1か月前から企画書を作成し、運営委員会で承認をもらって行った。(後期は、前例があったため、関係者だけに依頼するのみだった。)

4-2 対象

プロジェクトワーク参加者:朝日大学留学生別科 全学生

前期 40名 (ベトナム、中国、ドイツ、ミャンマー、ネパール)

初～初中級レベル24名、中級レベル～18名

後期 36名 (ベトナム、中国、ドイツ、ミャンマー)

初～初中級レベル18名、中級レベル～18名

インタビュー対象者(ゲスト):朝日大学関係者 (学生2名に対してゲスト1名)

前期 朝日大学留学生別科関係者 計20名

(留学生別科別科長、専任講師3名、非常勤講師8名、別科兼担講師3名、別科職員2名、学事二課2名、入試広報課1名)

後期 朝日大学留学生別科関係者 5名 朝日大学体育会 7団体より13名 計18名

(留学生別科別科長、専任講師3名、非常勤講師1名
会計研究部2名、相撲部2名、卓球部2名、剣道部2名、フェンシング部2名、
ホッケー部2名、硬式野球部1名)

4-3 スケジュール

実施期間は前後期の日本語能力試験が終わったあとの1か月の総合演習の時間を使う。前期は、文型文法1, 2クラスと3, 4クラスが別スケジュールで、担当教師も別だったので割愛するが、後期は表1のとおりである。

月	火	水	木	金
1月5日	1月6日	1月7日	1月8日	1月9日
冬休み	口頭表現 インタビュー スキル		総合演習 動機付けとペア、 担当決め	
1月12日	1月13日	1月14日	1月15日	1月16日
	口頭表現 インタビュー マナー クロージング	インタビュー開始	総合演習 質問内容確認 名刺作成	
1月19日	1月20日	1月21日	1月22日	1月23日
	口頭表現 インタビュー感想 発表準備	インタビュー終了	総合演習 インタビュー記事 まとめ	
1月26日	1月27日	1月28日	1月29日	1月30日
	口頭表現 1年間振り返り スピーチ	<u>原稿締切</u>	補講	補講
2月2日	2月3日	2月4日	2月5日	2月6日
期末試験	<u>報告会</u>	成績発表		

表1 スケジュール

4-4 授業の流れ

授業は以下の流れで行った。②、③、⑩に関しては、後期は「口頭表現」で既に実施練習していたため、確認作業として行った。また、前期の初級～初中級レベルの学生は、教員の指導によりパワーポイント作成も行っている。

- ① プロジェクトの説明と動機づけ／活動ペア・担当決定
- ② インタビュースキル訓練
インタビュースキル： あいづちの意味と練習、質問の仕方、会話の展開練習
メモ訓練： 聞いたことをメモする / メモ再生訓練： メモから文章を再生する
インタビューマナー（初対面に対してのあいさつ、クロージングのロールプレイ）
- ③ 敬語の確認、復習
- ④ 質問を考える（ただし、ゲスト全員に「共通質問」をすることは必須条件）
- ⑤ 名刺作成、インタビューのロールプレイ
- ⑥ インタビュー実施
- ⑦ インタビューのフィードバック／記事を書き、まとめる
- ⑧ 記事をゲストに送り、内容を確認してもらい、掲載許可をもらう
- ⑨ 入稿／報告会準備
- ⑩ 仮原稿集で、報告発表会（学生スピーチ）
- ⑪ パンフレット完成、配布

4-5 授業活動の様子

① プロジェクトの説明と動機づけ／活動ペアと担当決定

プロジェクトワークで一番重要なことは、動機づけである。この段階で、参加者が意義を見出せない、最後まで「やらされた感」がつかまとう。このプロジェクトが、何のために行われるのか、参加者にとってどんなメリットがあるのか、完成するとどんな結果になるのか、等を詳しくイメージできるように説明する。最終日の報告会までの作業工程も予め学生に配布しておく。

留学生の反応は『『日本人』と話せる／話さなければならない』という現実期待を見せたり、不安があったりと様々であったが、誰一人参加を拒否する者はいなかった。何よりも「誰にインタビューするのか」「誰とペアを組むのか」などで頭がいっぱいの様子だった。

次にプロジェクトワークで共に活動するペアを発表する。プロジェクトワークでは、学生主体を謳う以上、学生自身で決めさせるということも考えた。しかし「実践共同体に参加するプロジェクト」であり、「新参者」（レイヴ他 前述）として「（組織における）一人の大人」（梶原 2010a, b, c）として行動する、という一つの使命を課すため、教員がレベルと性格を考慮してペアを決めた。

特に「会話に積極的かどうか」を基準にして、積極的な学生には積極的な学生、消極的な学生には消極的な学生を充て、できるだけ日本語で話す機会が均等になるよう心がけた。また中級以上のレベルの学生に対しては、他国の留学生と組ませて、相談も日本語で話せるように配慮した。

ペアが決まった学生たちは、喜んだり照れたり様々であったが、配慮してペアを決めたこともあって、前後期とも大きな問題は発生しなかった。今後、最終日の報告会までは、そのペアで常に相談し行動することを義務付けた。

そしてインタビューを担当するゲストの発表でも、学生たちは自分たちの名前が挙がるたびに、ざわめいていたが、それは不満の声ではなく、『『本当に』『自分たち 2 人だけで』日本人にインタビューしなければならないんだ』という現実に対する武者震いに見えた。

② インタビュースキル訓練／③ 敬語の確認、復習

インタビュースキルや敬語に関しては、梶原(2003、2005)に詳しく言及しているが、日本人ゲストに気持ちよく話を聞いてもらうためには、「あいづち」と相手の回答に対する会話の展開を意識させることに重点を置く。単純にうなずいたり首を傾げたりする動作や、「そうですね」「そうですか」などの些細な語尾でインタビューの流れが変わることなどを指導する。特に後期の「口頭表現」の授業では、最終的に日本人にインタビューができるという到達目標を立てていたため、この段階までに学生たちは既に訓練を積んでいた。

またメモに関しては、「聴解」の授業で毎回ディクテーションが必須であったため、聞きなれない言葉に関しても、とりあえずメモはできていた。ただ問題は、インタビュー中に留学生二人ともがメモに必死になって沈黙が続く、ゲストを置き去りにすることがあるので、ペアで交替してメモをするか、ゲストに許可をもらって録音させてもらうように指示をした。

今回特に指導に重点を置くのは、クロージングである。多くの学生は緊張しているため、インタビューの最初の挨拶やマナーなどは意識して行動できるのだが、クロージングは、そのときのゲストとの話の盛り上がり状況や留学生の緊張状態で、おろそかになってしまうことが多い。そのため、最後は「失礼のないようにどうやってインタビューを終わらせられるか」を学生間で話し合ったり、実際にロールプレイをしたりして、最後まで意識するよう指導する。

④ 質問を考える／⑤ 名刺作成、インタビューのロールプレイ

この時期になると、インタビューをする日がそれぞれ決まってくる。インタビューは留学生がゲストの指定する時間と場所に訪問することになっているので、学生それぞれが色めきだってくる。ゲストに失礼がないかを意識しながら、それでも学生たちが聞きたい質問を準備する。インタビュー自体は30分程度とゲストに伝えているのだが、学生たちには予備の質問を含めて20問以上の質問を考えるよう指導する。

質問の中には、プライベートなことを聞くものや、なぜそれを質問するのか意味不明なものがあるため、学生たちの質問項目を机間巡視しながらチェックした。特に初級の学生に多いのだが、単純に質問し続け尋問調にならないように、相手が答えたら必ずそれに反応するように、あるいは、自分もその質問に答えられるようにしておくことを注意する。

名刺は、用意したカードに手書きで名刺を書かせるが、名刺に何を書くかは、学生たちがそれぞれ工夫する。自分の個人情報を書いた名刺を差し出すというロールプレイを行うことで、学生たちに「インタビューをする責任感」をより印象づける。

⑥ インタビュー実施

残念ながら、ゲストが指定する場所に留学生が訪問してインタビューをする形式なので、教員は関与できない。だからこそ、学生たちも必死になって準備をする。「今からインタビューに行ってきます」と報告してくる留学生が多い。そのたびに教員は「頼みます！」とお願いをして送り出ようとしている。これは、プロジェクトが教員によって「させられている」のではなく、教員に「依頼されて行っている」のである。インタビューで失礼なことがあれば、担当教員もお詫びをしなければならない、という関係性を最初の段階で話してあったので、学生たちは「留学生別科代表」としての使命を帯びインタビューに向かう。単純に個人の興味で動くのではなく、記事を作るために、留学生別科の代表として、インタビューに行く、その状況を作り出すことで、学生たちのインタビュー動機はさらに強くなると考える。ただ、インタビューが終わった直後の報告はあまりない。おそらく留学生たちは、力尽きてそのまま帰っているようである。結局、教員はインタビューがうまくいったのかどうか、やきもきしながら事態を見守るしか

ない。教師がコントロールできないことがある、それが、プロジェクトワークの一番の特徴である。

⑦ インタビューのフィードバック／記事を書き、まとめる

インタビューが終わった学生たちは、休み時間などのおしゃべりで、それぞれの感想を伝えている。インタビューが終わっていない学生は、彼らの感想や失敗談を聞いてさらに準備をする。クラスレベルが違って、することは同じであるため、学生同士も必死になって情報をやりとりしている。学生間で既に情報交換をしているが、授業内で再度インタビューの感想や失敗したことなどの報告を聞き、情報を平等に共有する。幸い、2回ともゲストからのクレームはなかったのだが、学生たちは必ず何らかの失敗点を挙げる。その点を報告しクラスで共有することで、今後日本人と会話をする時に何に注意すべきか、などのポイントが見えてくる。学生たちは、銘々に感想を挙げながら真剣に聞いていた。

インタビューが終わった学生たちは、自分たちのメモから記事をまとめる。指定の原稿用紙のテンプレート(400字～600字程度3枚)を渡し、完成見本を見ながら記事にまとめていく。録音していた学生は、聞きそびれた単語を何度も再生して、ペアで辞書を調べる。どうしてもわからないときは、教員に聞くこともある。原稿は学生にとってそれほど難しい作業ではないようである。Q&A式で書くためもあるし、使用文型も初級レベルの「～そうです」「～のことです」などなので、細かい文法の間違ひはあるが日本語文法的に問題はなく、第一稿は比較的早く教員の手元に届く。

ただ気になったのは、自分たちが作った記事なのに見出しが作れないという学生が散見された。記事の見出しは、作文のタイトルの要素もあるが、むしろ読解情報の要約として指導するべきだと考える。次回の改善点の一つである。

第一稿をもらった教員は、学生の手原稿の記事のテンプレートに入力する。本当は、この作業も学生にしてもらいたいのだが、学生のPCスキルの差が大きく時間がかかるので、教員が担当することになっている。

⑧ 記事をゲストに送り、内容を確認してもらい、掲載許可をもらう

学生たちは、第一稿を提出した段階で役割は終わったと思っている。しかし、仮記事ができたら再度ゲストに会って、記事の内容を確認して掲載許可をもらうという役割がある。日本語教師は、学生たちの文法や語彙の問題は修正できるが、さすがにインタビューの内容に関してはわからない。出来上がった仮記事を持って、学生たちは再度ゲストに会う約束をとる。後期、日本人学生がゲストだった留学生は、名刺を渡す際、メールアドレスや電話番号をインタビューで聞いておくよう指示をしてあったので、連絡して会う約束をしていた。中には、インタビューで緊張しすぎて、記事の写真を撮ることを忘れていた学生もいたのだが、この段階でゲストにお詫びして、改めて写真を撮らせてもらう。これらのやりとりは、よほど問題がない限り(例:連絡がとれない)学生自身にさせる。日本人に電話をかける、メールを送る、再度ゲストに会って先日のインタビューのお礼を言う、等、学生自身が想定している以上に、日本語を使用する場面が実はこの段階でも用意されている。

⑨ 入稿／報告会準備

ゲストに掲載許可をもらい教員に報告したら、最後の報告会の準備に入る。記事を作成していた時に入れることができなかった内容やインタビューの感想をまとめる。そして、この報告会が期末の最後の授業なので、半年間・1年間を振り返ってのスピーチを兼ねて行うよう伝える。「最後の授業」という言葉に学生たちは毎回反応する。インタビュープロジェクトが終わるというだけでなく、半年間一緒に学んだ学生たちとの最後の時間だということも痛感しているようだ。クラスには4月生と9年生と一緒に勉強しているので、仲が良かったクラスメイトと離れ離れになってしまう。そのためにも最後の報告会はいいものにしようという動機づけを行う。また、報告会の最後に学生全員で写真を撮って、それをパ

ンプレットの表紙にすることも伝える。当日の欠席をできるだけ防ぐために、学生の所属意識を刺激する。

⑩ 仮原稿集による報告発表会(学生スピーチ)

当日朝、ペアによっては早めに登校して発表準備をしている。口頭表現の授業でスピーチ、プレゼンテーションを指導しているので、できるだけ原稿や記事を読まないようにするために話し合っているようである。教室にはパソコンを用意してプロジェクターで、ゲストの写真が見られるようにしておく。

報告会で、再度「最後の授業」であることを改めて伝える。そしてこの半年間の成果を披露するのが、この報告会であることを強調する。教室は静まり返っている。そして、学生が発表している間、他の学生たちは発表の内容をメモし、発表者にメッセージを書くように指示をする。静かにまじめに聞いてもらうためである。

発表が始まる。学生たちは、興味深く発表者の発表を聞いたり、記事を読んだりしていた。同じインタビューをしても、ゲストが違うため、どの発表も新鮮に感じているようである。残念ながら、初級レベルの学生は、記事をそのまま読んでしまっているが、それでも Q&A の形で質問者と回答者、それぞれの役割を担うなどの工夫をしていた。前期は担当教員のアイデアで、初級～初中級レベルの学生たちがそれぞれパワーポイントを作ってきていた。朝日大学留学生別科のカリキュラムにはパソコンスキルを教える授業はない。おそらく大変だったと思われる。しかし、パワーポイントは日本語能力とは関係がないので、学生がそれぞれ遊びを取り入れ面白い発表になっていた。初級レベルの学生が仕上げたパワーポイントは、準備をしていなかった中上級レベルの留学生に強い刺激を与えていたようである。後期も行いたかったが、時間的に難しく断念した。今後の課題にしたい。

発表が終わると、全員で拍手を送る。発表を聞いていた学生たちが書いたメッセージを後で読むと、「日本語が上手になったね」や「〇〇についての話がおもしろかった」「どうしてそんなに日本語が上手ですか。私も上手になりたいです」など、短いそれぞれ個人に宛てたメッセージが書かれていた。作業の関係でそのメッセージは直接本人の手元に届けられなかったが、朝日大学留学生別科のフェイスブックの写真のコメント欄にたくさん載せることにした。

また、何らかの問題でペアの留学生が来ず、一人で発表しなければならない留学生もいた。しかしそれまで協働していた信頼感や使命感があって、誰一人ひるむことなく発表を行っていた。聞いている学生たちも「よく一人でがんばった」とメッセージを残し、大きな拍手を送っていた。

後期は、部活動の関係でゲストの参加はいただけなかったが、インタビューゲストにも報告会の招待状を送っていた。特に仕事で忙しい教職員には、発表者の時間を予め知らせておいたので、その時間を見計らって会場に何人かが駆けつけてくださった。発表する留学生は、一瞬驚くが、そのゲストが見ている前で、インタビューで聞いたことを正確に伝え、またインタビューで感じたことを正直に語ろうとしていた。そしてスピーチの最後に「実は、〇〇先生が、今日来てくださっています」と伝えた瞬間、聴いていた学生たちが一斉に後ろを振り返る、このような場面が前期では何度かあった。別科全学生の視線を浴び、恐縮しながらゲストがコメントを述べ、学生たちは再び暖かい拍手を送った。ゲストが来たことにより、このプロジェクトが留学生だけの活動ではないこと、留学生の活動によって日本人が「わざわざ」来てくださったということ、それは、自分たちの活動が目的組織の人間に認められた、という実感ができる瞬間であった。

全員の発表を終え、学生たちには最後の感想を書きこんでもらう。「朝日大学留学生別科とはどんなところですか」という質問である。この質問は、報告会でわかったことを書かせると同時に、自分が属している組織が、どんな組織であるかを再度認識してもらうためである。もちろん、不満や不信もあつ

たことであろう。だがそこに書かれたコメントは、

「あさひだいがくが、いいだいがくだとわかった」(後期)

「スポーツがじょうずなひとがおおくとよくわかった」(後期)

「朝日大学別科の先生をもっと知ります。とてもおもしろいです」(前期)

「私はたくさんの先生のことだんだんわかります。ほこりだと思えます」(前期)

など、それぞれが持ったイメージが書かれていたり、また

「みんなと会えてよかった。卒業したくない」(前期)

「これで最後の授業も終わりました。みんなの笑顔を忘れまいと誓います」(後期) (以上原文まま) など卒業(修了)やメンバーとの別れを惜しむ感想が毎回書かれており、ほとんどの学生が所属する組織に愛着を覚えていたようである。これらの感想は「最後の授業」であったからではあり、この半年間の歴史があったからであるが、それ以上に、自分たちが所属する組織のために動くという一体感によって、より朝日大学留学生別科とそのメンバーに所属意識が強くなったのではないだろうかと考える。

そして報告会の最後は、全員で表紙用の写真を撮る。自分が所属していた、確かにここで勉強したという事実を残すために、また自分たちでパンフレットを作ったという実感を噛みしめるために、学生たちは思い思いのスタイルで、写真に写っていた。

4. まとめ

以上が、2014年度朝日大学留学生別科のインタビュープロジェクトの概要である。前期、後期と2回行った分をまとめて報告した。

全体的に言えることは、プロジェクトワークを行う前に、既に各レベルでのクラスコミュニティ(学生同士の交友関係)が形成されていたことや、今回のプロジェクトワークに必要な言語スキルは既に指導されていたので、比較的円滑に進んだと思っている。

ただ、1点気になったのが、後期の体育会の学生とのインタビューである。「別科の留学生についてどう思いますか」という共通質問を課していたのだが、ほとんどの学生が「留学生別科の存在を知らなかった」「留学生がこんなにいるとは知らなかった」という感想だったのだ。日本人にインタビューをすることを期待していた留学生にとっては、少々ショックな発言であったようだ。「先生、日本人学生は、私たちのことを知りません」とうなだれる留学生。しかし、それが現在の朝日大学留学生別科の立ち位置なのである。そして今回のインタビュープロジェクトを通して、一人でも多くの日本人学生に留学生の存在を知る機会が提供できたと考え、今後も継続して行っていくことが、朝日大学留学生別科としての正統的周辺参加だと考える。

そして今回、何よりも感謝したいことは、このプロジェクトワークを始めるにあたってのゲストの協力受け入れの早さだった。前期は、丸山和美別科長が運営委員会で他の先生方や職員に説明する際に後押しをしてくださり、後期は、別科長から学生部長の山本英弘教授を紹介していただき、その山本教授が学事二課の久世仁美氏を通じて、体育会の学生をあっという間に集めてくださった。この場を借りて、改めてお礼を申し上げる。実は、他の教育機関でゲストを募るときは、非常に時間も手間もかかっていた。特に最初のプロジェクトワークの場合、外国人との接点がなかった方などは、どんなことをするのかイメージができないため、一人一人に説明して回らなければならないことが多かったからだ。回を重ねるとリピーターのゲストも増えて簡易化されてきたが、それでも複数のゲストを集める場合、

2か月前から準備をしなければならなかった。

今回、非常に効率よくプロジェクトができたのは、やはり地方の婦人会と違い、大学自体が既に「実践共同体」であるからだと痛切に感じている。実践共同体というのは「制度的枠組みをリソースとして利用しつつ、実践を共有する中で状況的に構成され再構成された」ものである。単純に制度的な「組織」と考えると、逆に制度的な制約がかかってプロジェクトワークを実施するのに時間がかかる場合もある。しかし大学は、(一般の企業組織と違い)各学部、各部署で独自の研究や任務を持ちながら「大学を運営する」という一つの実践を共有している、つまり、実践を共有した共同体なのである。そして、学生自身も大学を構成する「重要で正統的な要員」である。彼らが積極的に活動(研究や部活動、学園祭等)に参画することで、大学はより発展していく。それは、別科の留学生も然りである。

留学生別科の留学生にとって、大学という共同体は非常にリソースに満ちた空間である。これは同じ予備教育校の日本語学校にはない大きな利点である。廊下を挟んだ向こうの教室には、日本人学生が勉強している。グラウンドでは部活で走っている日本人学生もいる。専門知識が豊富な教授もすぐそばにいる。また図書館や情報処理センター、食堂や売店など、正規の大学生と同等のサービスが受けられる。大学は実践共同体として、いつでも留学生たちを受け入れる用意をしているのである。だからこそ私たち日本語教員は、その場所や使い方を単純に「リソース」として「教える」だけでなく、留学生自身でその扉を開けさせる仕組みを考えるべきである。試行錯誤しながら自分で扉を開き、大学という共同体に積極的に参加すれば、留学生たちは自ずとその実践共同体の正統な一員として認められる。この体験が得られれば、留学生たちの親和欲求、承認欲求は満たされ、より朝日大学に愛着と誇りを感じてくれるのではないかと考える。そのためにも、朝日大学留学生別科のプロジェクトワークは、問題点を改善しながら、様々な学部や部署の協力を仰ぎながら、継続して行っていきたいと考えている。

参考文献

- ジョン・デューイ(2004)市村尚久(訳)「経験と教育」講談社学術文庫
- Diana L Fried-Booth (1986) 「PROJECT WORK」 Oxford University Press
- ジョン・S.ブラウン、アラン・コリンズ、ポール・ダグイッド(1991) 道又爾(訳)「状況的認知と学習の文化」『現代思想』19巻6号 62-87 青土社
- 上野直樹、ソーヤーえりこ(2006)「文化と状況的学習 実践、言語、人工物へのアクセスデザイン」凡人社
- ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー(1993) 佐伯胖(訳)「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」産業図書
- 横田雅弘(1991)「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」異文化間教育5 81-97
- 田中共子(2000)「留学生のソーシャルネットワークとソーシャルスキル」ナカニシヤ出版
- 梶原綾乃(2003)「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」日本語教育 117号 93-102
- 梶原綾乃(2004a)『『日本事情』における中国人留学生の日本人観～『日本人への質問』から見る日本～』愛媛女子短期大学紀要 第14・15合併号 1-13
- 梶原綾乃(2004b)「地域交流を目的としたインタビュープロジェクト—日本人との出会いを演出、体験する」2004年度日本語教育学会第5回研究集会 実践研究フォーラム予稿集 99-102
- 梶原綾乃(2005a)「地域交流を目的としたインタビュープロジェクトを通して見えてきたもの—敬語指

導の問題点と新しいプロジェクトワーク観、そして実践研究」愛媛女子短期大学紀要 第 17 号
137-147

梶原綾乃(2005b)「地域交流を目的としたコースデザイン—留学生は何のために日本語で話すのか—」2005 年度日本語教育学会第 5 回研究集会 実践研究フォーラム予稿集 42-45

梶原綾乃(2006a)「留学生発信型の地域交流の試み—交流活動の整備、拡大化、循環化—」2006 年度日本語教育学会第7回研究集会 実践研究フォーラム予稿集 21-24

梶原綾乃(2006b)「留学生の社会参加と宇和島市における国際交流の可能性 2004 年～2006 年愛媛女子短期大学国際交流コース活動報告」愛媛女子短期大学紀要 第 18 号 159-173

梶原綾乃(2010a)「正統的周辺参加理論を応用したプロジェクトワーク～学生が教職員を変える可能性～」初年次教育学会第 3 回大会(高千穂大学)予稿集

梶原綾乃(2010b)「正統的周辺参加と失敗学～私立大学で行ったプロジェクトワークの実践報告」日本キャリアデザイン学会 第 7 回研究大会・総会(神戸学院大学)予稿集

梶原綾乃(2010c)「初中等教育文化の過剰適応とキャリア教育 ～あるプロジェクトワークを通して見えてきたもの～」日本キャリアデザイン学会 第2回関西大会・(関西大学)予稿集